（昭和16年7月30日第3種郵便物認可） 日刊・第26783号

7月22日（土）2017年

新潟日報

Otona おとなプラス

昨年開業した新宿駅隣接のバスターミナル「バスタ新宿」。4階にあるバス乗り場には、全国各地から高速バスが乗り入れる＝東京都（イラストは整理部・佐藤仁）

夏の夜 原作の舞台探しに

プロローグ

夜行バスの旅

プシュー、と音を立てて薄暗い池袋駅東口（東京都豊島区）にバスが止まる。巨大な車体が長旅を終え、深く息をついたように見える。こった肩をもみながら地面に降り立つと、駅前の飲食店街の雑多なにおいが早朝の空気に混ざって漂ってきた。

全国各地から高速バスが集まる東口五差路近くのバス停留所。長らく東京行きのバスの終着点として、新潟県民にはおなじみだ。新宿には最新のターミナル「バスタ新宿」があるが、新潟発のバスは今も多くが池袋で回送に切り替わる。

新潟と東京を結ぶ夜行バスを舞台にした人間模様を描き、第151回直木賞候補作となった「ミッドナイト・バス」。作者の伊吹有喜さんも、三重県の実家へ帰る時にはここでバスに乗ったという。執筆中はよく新潟行きの乗客を眺め、登場人物のイメージを練ったそうだ。

小説では主人公の家族の人生に、夜行バスに乗り込むさまざまな乗客の物語が交差してつづられていく。

上京する息子と別れ、新潟に帰る母親。夢に挑む若者。初めて見る恋人の古里に胸を弾ませる女性―。東京での彼らのイメージをたどりたくて、伊吹さんにぶしつけなお願いをした。「小説に出てくる場所のモデルを教えてくれませんか」。

少しして、長い長いお返事をいただいた。読み終えて、興奮したままバスを予約した。

夏は夜。夜を抜けて走るバスで旅に出た。新潟発着の夜行便がつなぐ、東京、大阪、京都、名古屋、そして仙台。まずは小説の舞台を訪ねて、東京―。

（報道部・山田悠）

ミッドナイト・バス

新潟日報140年

〈原作あらすじ〉主人公の高宮利一は長距離深夜バスの運転手。16年前に離婚し、乗務の合間に東京に住む恋人古井志穂と会う生活を送っている。

ある日、運転する夜行バスに別れた妻・加賀美雪が乗車してきた。長男の怜司は会社を辞めて新潟に戻ってきた。長女の彩菜は夢と結婚の間で悩む。人生の岐路でそれぞれの傷と向き合い、再出発する家族の姿を描く。

新潟日報社は創業140年記念事業として、同小説を原作とする映画「ミッドナイト・バス」をストラーダフィルムズ（東京）と共同製作している。来年1月に県内で先行公開する。